

地域プロジェクトⅢ・Ⅳ成果報告書

Halifax×函館プロジェクト

①背景・目的・概要

背景：函館市の姉妹都市のカナダ・ハリファックス及び、ノバスコシア州における地域課題には、函館市が抱える地域課題と類似したものが多く、これらの課題に対しての取り組みを理解し、それぞれの地域を比較分析することで、函館・道南地域の持続的発展を考える視点を養う。

目的：①ノバスコシア州及びハリファックスの地域社会の実態を理解する。

②ノバスコシア州及びハリファックスの事例を通じて、函館・道南地域の持続的発展に向けた視点を見つける。

③ハリファックス訪問の成果を、函館・道南地域の持続的発展につながる形で還元する。

概要：函館市の姉妹都市であるカナダ・ハリファックスについての事前学習で地域の抱える地域課題に対する取り組みを理解し、この知識を踏まえて現地研修を行い、地域で活動している様々な団体・組織を訪問し、函館・道南地域の持続的発展につながる視点を探す。

②年間スケジュール表

地域プロジェクトⅢ	地域プロジェクトⅣ
第1回 オリエンテーション 進め方、発表テーマの設定、Welcome to Nova Scotia (予習課題)	9月18-29日 ハリファックス現地研修 18・28-29日 移動日 20-27日 各種研修
第2回 Welcome to Nova Scotia	現地での知見の整理
第3回 移民・難民: Immigrant Service Association of Nova Scotia	函館市の地域課題の解決に向けた取り組みの考案
第4回 貧困: United Way Halifax	2つのテーマに分け、函館の現状確認
第5回 児童福祉・人種: Akoma, Association of Black Social Workers	現状確認の方法としてインタビューの実施
第6回 市民協働: Engage Nova Scotia	インタビュー結果のまとめ・発表
第7回 若者・政治: Lindell Smith, Youth Council	成果発表会に向けた準備
第8-10回 第3回から第7回のテーマに関する理解を深める、発表資料用意	函館・ハリファックス協会のクリスマス会にゲストスピーカーとして参加
第11回 英語指導	クリスマスファンタジーでのパネル展示の準備
第12・13回 模擬ワークショップ	成果発表会
第14・15回 学生プレゼン練習 (ハリファックス中央図書館で発表予定)	

③プロセスと成果

このプロジェクトでは、2つのグループに分かれて活動を進めてきたため、それぞれのグループのプロセスと成果をまとめることにする。

○1つ目のグループは、ハリファックスでの研修を通して、現地のローカルガバナンスが函館と異なるということに気付き、それには次の3点が大きく影響していることを学んだ。1つ目はハリファックス市長のマイク・サベッジさんの地域政策に対する考え方だ。市長は自分より年齢的に長く生きることになる若者の意見や批判を受け入れることを重視していた。また、研修期間の中で行われていた「スイッチハリファックス」というイベントでは、市民の暮らしやすい地区を知るためのアンケート調査を行い、そこで住民に対して政治参加の促進を行っていた。2つ目に、市議会議員のリンデル・スミスさんの活動だ。彼は、若者に政治の面白さを伝えるということを目指して活動している。研修の中では、彼の活動の一つとしてあった住民と協働で作った公園も見えてきた。3つ目に、課題解決に取り組む市民団体に対しての支援を行っているユナイテッドウェイという組織だ。パートナーシップ協定というものを行い政府と企業の間組織的役割を果たしている。この3つの取り組みをまとめると、ハリファックスでのローカルガバナンスの形態として、市民と行政が手を取り合い、共通の課題意識が形成することによりまちづくりが進んでいくことを学んだ。この学びを踏まえ、函館に戻ってきてからは、西部地区に焦点を当て、行政と市民団体の両方にインタビューを行った。結果として、行政と市民の西部地区に対する理想の違いや、お互いの役割の認識の違いが明らかにすることができた。

○2つ目のグループは外国人住民のライフストーリー調査を行った。このグループではまず、現地の研修で「**Social Justice in Focus**」というイベントに参加したことがプロジェクトを進める契機となった。このイベントは「難民というバックグラウンドを持つ若者がワークショップへの参加を通じて社会正義や社会参加の意義を見つける」というもので、彼ら自身の語りからその人の人生や生き方が見えて鮮明に見えてきた。難民の若者の話を聞くだけでなく、「難民」という人たちの視点に立った考え方を体験することができた。加えて、ISANSという移民の支援団体を訪問し、そこで、移民をクローズアップしたストーリーブックを頂いてきた。そのストーリーブックからは、個人のストーリーの中でISANSの支援プログラムがそれぞれのハリファックスでの生活にどう生きてくるのかが浮かび上がってきた。以上の二点のハリファックスでの学びを受け、函館で暮らす外国人のそれぞれのライフストーリーから見えてくる「函館での暮らし」についての考察に至った。調査方法はインタビュー調査で函館で暮らす10人の外国人住民の方にインタビューを行った。インタビュー調査を通して、外国人住民の方が職場の仲間や家族のつながりの中で情報を得たり、手続きを行うなどして生活しているが、それは家族や地域住民の善意で成り立っているのではないかと考えた。一見、助け合いの形でいい事のように思えるが、それは同時に支援に至るまでがシステム化されていないという現状があるのも事実であった。これらの実情を受けて函館社会の一構成員としての市民として生活できているのかという問題意識をもった。

④総括と反省・今後の課題

総括と反省：ハリファックスでは現地の図書館とセントメリーズ大学、函館では函館・ハリファックス協会ですれぞれ発表を行うことを通じて、互いの地域課題に対する意識を共有し、両地域間の結びつきを強めることができた。また、反省点としては、言語能力不足によって現地の人の言葉を理解し、自分の意見を伝えるということが十分にできなかったことが挙げられる。

今後の課題：函館での活動が調査のみで終結してしまい、ハリファックスでの学びを十分に還元しきれなかったため、今後、卒論研究の形でさらに発展させ、政策提言に値するレベルでの問題の明晰化を目指すこと。

⑤地域からの評価

○現地での発表では、函館の外国人児童への対応や空き家問題の現状に関心を持って聴いてもらい、発表スライドもわかりやすくまとめられていると講評をもらった。同時に、現地の学生から、「建物のリノベーションだけでは不十分であり、人が入る仕組みを考えなければ、高齢化など根本的な問題の解決には結びつかないのではないか」、「観光客に対しての取り組みばかりしていると、地元の人が住めない環境になる可能性があるのではないか」などのコメントも受けた。

○函館・ハリファックス協会の方々より、若者の前向きな交流の様子を聞いて元気が出たなどの温かいお言葉も頂いた。

⑥メンバー一覧

指導教員：古地順一郎、中村直樹、森谷康文、パーソンズ・アンドレ

学生：石黒順也、佐藤遥、高橋佑、中村百恵、村上陽菜

